

昭和42年度

中央図書館の活動報告

調布市立中央図書館

昭和42年度 調布市立中央図書館の活動報告

調布市立中央図書館

1. はしがき

調布市立中央図書館は、昭和41年6月開館以来、昭和42年3月31日現在まで1年10月が経過し、その間市民の文化活動の一環としてその業務遂行に鋭意努力してきた。

開館当初は、職員2名、蔵書数 5,623 冊で発足したものが、昭和42年度末現在においては職員7名、蔵書数 14,860 冊となり、人的物的にも内容が充実してきた。しかしながら、現在の職員構成(館長、図書館員4名、庶務係1名、再読員1名)と蔵書数では、開館以来1年10月の間に市民にようやく図書館の存在が知られはじめたというところで、到底満足すべき図書館活動は起こない筈ない。今後、図書館サービスの需要が増加するにつれ、ますますこれに应付される体制を整えなければ、市民の要求を遂げることができなくなるであろう。

この図書館サービスの需要とそれに対する受入れ体制という点からみたものが、別表之の「図書館利用状況前年度との比較調査」である。これによると、入館者は 47,000 余人増加し1.85倍、貸出登録者は 6,200 余人増加し3倍強と大幅に増えている。しかし登録率は 2.4%から 6.9%と2.9倍に率の上からは増加しているが、市民100人について1.6割の割合でしか図書館の常時利用者がいないのである。即ち、

図書の新増冊数が前年度と比べ3倍となり5万冊の増出しをふこなったが、市民1人当りにするとわずかに0.37冊にしかならない。これは前年度の0.12冊の3倍とはいいながらも、市民100人でやっと4冊の利用というのが現状である。一方、登録者の図書利用程度をみると、前年と本年度とはほとんど変わらず5冊程度の貸出しを受けている。

これに対する受け入れ体制として、蔵書数は前年度末 9,254 冊から 5,606 冊増加し、14,860 冊となり1.6 倍となったが、市民1人当りの図書数(図書保証率)は 0.07 冊から 0.11 冊にしかならない。即ち、市立図書館にあるあらゆる図書を含めても、市民1人について 0.1 冊の割合でしか本がいそわたらないのである。貸出冊数を蔵書数で除したのが繰書回転率であるが、昨年度が 1.73 回であったものが、本年度は 3.34 回と 1.93 倍になった。これは蔵書1冊が本年度の場合 3.34 回貸出されたことを意味し、図書の利用が高くなったことを示す反面、蔵書が利用に対して少ないため回転が多くなり、図書館の蔵書に於ける期間が短いことを表わしているのである。

次に閲覧用の座席については、164 座席あったものが蔵書が増加したため、座席を減らすことを余儀なくされ、本年度は 144 座席となったため閲覧者に不便をかけることになった。座席数の減少と共に入館者の増加とあわせ座席回転率が高くなり、昨年度より1.6 倍と使用頻度が高くなった。この座席回転率は、1日の平均入館者数を座席数で除した数値であり、1日に1個の席が利用される回数を示している。昨年度が 1.62 倍であったものが本年度は 2.57 倍となり、これを一般と児童に分けてみると、一

般が 2.18 倍、児童が 4.92 倍と児童の利用率が非常に高くなっている。これは1日に1座席が一般と児童の回遊量が5回も利用されているわけである。

このように図書館に対する市民の利用が高まり、この需要に応ずるべく人員の配置、蔵書の増加率、受け入れ体制を整えてはいるが、いまだ図書館に対する市民の認識も浅く、広く利用されているとはいえず、また図書館側としても設備が不完全な状態にあるのが現実の姿である。

以下、昭和42年度(昭和42年4月1日から昭和43年3月31日まで)における図書館業務の概況と活動状況について、その実状と分析を述べ、市民の理解を深めかつ将来の図書館改善の資料としたい。

2. 利用者(入館者)について

図書館の利用者は、これを大別すると、図書を借りに来る人、館内で読書をする人、館の設備だけを利用し勉強する人(図書の利用は少ない)に分けられる。いずれにせよ、入館者は何らかの形で図書館を利用しているのであるが、利用する場合に図書館の開放時間、場所的制約と利用者の社会生活からくる各種の制約のため大きく妨げられている。

別表3の「階層別入館者数調」にみられるごとく、昭和42年度中の入館者総数 1,021,908 人のうち児童 51.9%、中学生 10.7%、学生(高校生・大学生) 31.2% と時間的制約の比較が少ない階層の利用があわせて 73.8% と圧倒的に多く、これに対して勤人・主婦・その他(自営、受験生、無職他)の階層は (3)

全てを含めても 26.2% でしかない。そのうち勤人は 7.5%、主婦においては 4.2% とごく少数の利用者しかみられないのである。この解消の一つの手段として、開館時間の夜間延長（現在は 22 時頃まで）が考えられるが、現在の図書館敷地では不可能である。また夜間利用者は偏りがあるので、サービスの方法としては、むしろ地域的制約をなくすことの方が効率的である。

このように時間的な制約と共に、図書館と利用者との距離的制約によっても、またその利用が大きくなる。このことは、入館者と地域別に調査した別表 4 の「地域別入館者調査」及び別表 5 の「図書館を中心とした距離別入館者調査」にみられるとおり、市立図書館を中心として半径 1 km 以内に居住している市民の利用が、圧倒的に多数をしめていることからもうかがうことができる。即ち、入館者総数 102,709 人のうち、1 km 以内の居住者の入館は 56.9% の 58,038 人をしめ、また 1 km ~ 1.5 km の居住者では 14.3% の 15,072 人であり、図書館を中心として半径 1.5 km 以内の入館者は総入館者の 51.2% と過半数となっている。

逆に、図書館から 2 km 以上の離れた地域に居住する市民の利用は、着しく低いものになっていることがはっきりする。即ち、この地域では入館者の 13.7% にすぎず、実数としては 14,195 人である。そのせ 1.5 km ~ 2 km の地域では 11.4% の 11,652 人である。また、図書館から 2 km 以内では入館者の 62.6% で 64,762 人が利用していることになる。

次に、地域（町）別の人口でその地域の入館者数を除した図書館利用率から見ると、図書館のある上布

田地区が 177.1% と最も高率となっており、これは上布田町に住む市民 1 人が年間平均 1.7 回利用していることがわかる。また、利用率の最も低いのは緑ヶ丘地区でわずかに 7.2% であり、市民 1 人の年間利用回数は 0.07 回にすぎない状態にあり、ここは図書館から最も遠い地域にあり、交通機関によらなければ利用できない位置にある。

市立図書館から 1 km 以内に居住する市民の図書館利用率は 120.7%、1 km ~ 1.5 km の地域では 61.9% であり、半径 1.5 km の円周内に居住する人の利用率は平均すると 95.1% となるから、この地域の市民は平均すると年 1 回程度市立図書館を利用している。また、1.5 km ~ 2 km の居住者の利用率は 65.4% となり、2 km 以内の平均利用率は 87.9% と比較的高い数値を示している。これに対し 2 km 以上の地域になると 21.6% と急激に低くなり、年間 0.2 回余りの利用しかなく、市内全域の平均が 56.7% であるから、全市民の図書館利用の年 0.5 回の半分以下となっている。

このように図書館と居住地域の距離は 1 km が理想ではあるが、少なくとも 1.5 km ないし 2 km が、利便さから考えると最大限の利用距離となる。それ以上の距離となると、利用者にとって時間的、経済的かつ心理的抵抗が大きくなり利用が著しく減少する。ただし、距離が遠くとも電車、バスの交通機関が市立図書館と日常生活の行動線上、—たとえば運動、通学、買物等—にある地域の市民についてはかなり高い利用率を示している。たとえば、飛田給の 63.8%、上石原の 68.7%、栗地の 80.2% とは、数値にみられるとおりである。

以上のように図書館を無難なく利用するためには、身近な場所に位置していることが何よりも重要な条件となってくるのである。そして具体的には少なくとも徒歩で利用できる1.5kmの範囲内にあると共に、日常生活の行動線上、いわゆる便利な所にあることが大切である。調布の市立図書館が真に市民のものになり、図書館サービスの提供が常に平等に受けられるようにするためには、この統計にみられる結果を考慮し、地域小図書館をさらに建設することが必要になってくる。それと同時に、地域貸出しとか団体貸出し等積極的に市民のなかに直接入りこんでいく利用方法を講じなければならない。このような方策を実施すれば、勤人とか主婦のように昼間仕事を持っている人とか、遠いために来館できない人の不便が解消され、全市民が利用する機会を持つことができるようになる。

(6)

3. 閲覧業務について

図書館の入館者のうち、図書を借出して自宅に持ち帰り読む人を除いた入館者が閲覧者となるが、このなかには図書館で読書する人と、単に図書館の座席を利用して勉強をする人などがある。

表6の「館内閲覧者調」にあるとおり、昭和42年度においては入館者総数102,908人があり、図書貸出しは49,704冊であるから、これを減じた数53,204人が館内閲覧者になる。図書館利用者のうちで最も館内閲覧者の比率の高いのは、「その他」として分類されている階層で、このなかには自営、自営業、無職などが含まれるがその多数は大学受験生である。

この階層の入館者14,848人のうち1472人の人が図書を利用しているにすぎなく、残りの9割(13,376人)の人が館内閲覧者であり、図書の利用も多くは学問参考書であり、そのほとんどの人は単に座席の利用のみにとどまっている。これに次いで、中学生の68%、学生(高校・大学生)の65%と館内閲覧の比率が高く、また児童では29%となっている。

このように中学生から大学生までの就学者の図書館利用者のうち、これを平均すると72%が館内閲覧者であり、館内で勉強・読書をしているわけである。

一方、勤人の17%、主婦の15%とこの階層の館内での閲覧は低く、来館者のうちの大部分は図書を借出し家に持ち帰って読書をする人達である。これは仕事の間接上、図書館で席を落ち着けて読書をする時間を持つことのできない利用者であり、この数値をみては図書館の利用は日常生活の時間制約に大きく左右されていることがはっきりする。

次に館内閲覧者数(53,204人)の内訳を各階層別にその割合をみると、学生39.4%、その他21.1%、児童13.7%、中学生14%の順になっており、勤人では2.4%、主婦は1.3%と利用者数の少ないところもあるが、この二つの階層の閲覧者は極端に少なくなっている。また、入館者総数102,908人のうち、閲覧をするのは勤人1% (1,293人)、主婦0.6% (663人)であるのに対し、学生は20.4% (20,424人)が館内閲覧をしているのが現実の姿である。

このように、時間制約の強い勤人・主婦階層にとって図書館の利用は困難であり、利用するにも館内

(7)

閲覧はできなく、どうしても貸出し中心になる。そのために、現代の図書館の機能は、従来のよつに暇のある人が、たまに図書館に来て利用するといった前近代の形ではなく、多忙な時間を最大限に利用するために、図書館は市民の書庫として貸出しも主体にすることが一番大きな目的となっている。また、読書活動を刺激していく、質的な読外活動も必要とされる。

(8)

×館が地域により大きな差があることについては先に述べたとおりであるが、これと共に図書館はどうしても市民の身近な位置にあることが必要になってくる。ここでいう身近な図書館というのは、建物の設備が立派なものであることは必ずしも必要なのでなく、地域文庫・配本所的なものでよいのであり、市民の居住地にそれがあり、手軽に図書と利用できる方法をこれからは考慮していかなければならないであろう。

現在、市立図書館の座席数は、244席といつわりかな寂しくなく、館内閲覧の利用が著しく妨げられている現実がある。即ち、座席の利用は1日の×館を座席数で除した座席回転率で表わされるが、学生・一般室では210%、児童室では492%、平均で257%となっている。これは一つの座席が一日に、学生・一般室では2.1回、児童室では実に4.9回も利用されているのであり、これでは利用者の望む時間に来て座席を選択し、自由にゆっくり読書ができる状態ではない。座席を確保するために前館時間前から外で待っていたり、閲覧室が満員のため×室を制限したりしているのが実情であり、電車に乗ってわざわざ出向いても、やむなく利用できずに帰る人もいるのである。たとえ座席が確保されても、閲覧室が手狭

なため、多数の人が入るとどうしても騒音が発生し、読書に適さない状態になることが多々あるのである。

現在の住居事情をみると、各家庭において読書・読書をおこなう環境が少ないこともあり、座席の利用のみに図書館が利用されることは、本来の目的に添わないのであるが、現実の問題としてはやむを得ないであろう。これらの人が図書館を利用することを身近なものに感じ、日常生活の一部のような気持ちを持つとしたならば、将来の真の図書館利用者に成長するであろう。

このように、現在すでに閲覧室は飽和状態にあるので、早急に何らかの処置改善策を講じなければならず、中央館として通用する設備をもった図書館の建設が待たれる段階が早くも到来している。

4. 貸出し業務について

一般に市民図書館は、学術の調査研究と資料の収集保存を目的とした専門図書館とことなり、教養・娯楽・趣味・実用等、市民全体の利用に供することを目的としている。そして利用形態の大きなものは図書の貸出しであり、調布市立中央図書館もこの目的に添って活動しており、蔵書もそのように収集し構成している。

このように当館の中心業務である貸出し業務のために、貸出し方法は最も進んだブラウン方式をとり、利用者は簡単な登録手続きにより、貸出し券を受取り手軽に借出すことができる。図書の選定は網架式書庫となっているので、借りようと思う本を自由に手にとってみるので容易であり、気安さと

(9)

便利さが供与される。

貸出し活動は登録率と貸出率により示されるが、登録率は奉仕人口（市民の全人口）で登録者数を除した数で得られ、これは図書館の知名度と利用者の借出し（利用）の意志を表わしている。

調布市立図書館の場合、別表2の「図書館利用状況前年度との比較調」にみられるとおり、昭和42年度においては6.9%であるので、市民100人に対しわずかに7人弱が登録をしているのにすぎない。しかし昨年度はさらに少なく2.4%であったことにくらべ、大幅な増加をみたりであるが、改米諸国に比較するとはるかに低いものであり、まだまだ市民に愛されない図書館となっている。

登録者の実数は、本年度では一般（中学生以上）4,706人、児童4,387人で、合計9,093人であったが、前年度は一般2,161人、児童721人で合計3,082人であった。これを一般・児童とに分けてその登録比をみると、本年度が一般53%、児童47%とほぼ半々の割合であるが、前年度ではそれが70%と30%の割合で児童が低い状態にあった。即ち、前年度の登録者を100としてその増減率をみると、平均で30.2%の増であるが、その内訳は一般では22.7%であり、児童においては実に47.6%と大幅に増加し、約2倍の児童が登録をしたことになる。

このように前年度が低く本年度が大幅に増加したのは、前年度は市立図書館の開館初年度のためにPR不足、サービス体制の不備、館外活動をしていない等の悪条件のために図書館に対する認識が一般的に低く、特に児童層にとって図書館が大人達のもの、学生のものというような考えが先入観としてあったの

ではないかと思われる。それが1年前の活動を通じてようやく児童に図書館に対する理解が深まった結果が、児童の大幅な登録の増加となって表われたのであろう。これには、学校図書館を訪問したり、学校との連絡を図ったことも大きい意味をもっていると考えられる。

では、この登録者の年間における図書館の利用程度を知るには貸出利用率があり、これは年間貸出冊数を登録者数で除した数値で表わされる。これによると前年度は5.09であり、その内訳は一般が4.68、児童が6.07である。即ち、登録者1人平均が1年前で5冊利用したことになり、そのうち一般が4.7冊、児童は6.1冊であった。これに対し本年度の平均利用率は5.35であり、このうち一般が5.36、児童が5.33であるから、登録者1人当り平均5冊を借り出して利用したことになる。これでみると、前年度は児童の方が図書館の利用が多かったが、本年度になっては同じ程度の利用率になり、わざわざのらも一般の登録者の図書館利用が多くなった。

次に、調布市の市民1人が図書館から年間何冊の図書館を借り出しているのかをみる数値として貸出率がある。これは年間貸出冊数を奉仕人口（市民の全人口）で除したもので示され、この数値は別表1及び2に記されたとおりである。即ち、本年度の貸出率は0.37であるから、市民1人が年間0.4冊弱を借り出しているにすぎない。これを前年度の0.12冊と比較すると3倍強の伸びとなり、実数で示すと、本年度48,704冊（一般26,307冊、児童22,397冊）であり、前年度は15,702冊（一般10,115冊、児童5,587冊）であった。

一般と児童とに分けて貸出冊数の割合をみると、本年度が53%と47%でやや一般が児童より多い程度であるが、前年度は64%と36%で児童が少ないのが目立っている。このように前年度の貸出率において一般と児童との差があるのは、先に述べた登録率の差と同様に図書館活動の初期段階にあったこと
(12)の理由によるものであろう。

次に別表2の中の蔵書の回転率をみると、前年度が1.73回であったのが、本年度では3.34回となり約2倍になっている。この回転率は年度末蔵書数で年間貸出し冊数を除した数値であり、1冊の図書が年間に利用された回数を示すものである。従ってこの蔵書回転率の数値が高ければ、図書資料がよく利用されていることになり、死蔵図書がなくなるわけである。本年度は図書館にある図書が平均して3.3回を貸出しに利用され、これは前年度よりも2倍も利用されている。

蔵書回転率を一般と児童とに分けて、前年度と比較すると次のようになる。前年度は一般が1.29回、児童が1.52回であり、本年度は一般2.14回、児童2.04回になるので、一般では1.66倍、児童では2.0倍となり、1冊の本がよく生かされ利用されるようになってきている。

このことからわかるように、一般と児童とを比較した場合に、児童図書の利用頻度がいかに高いかを示している。これは入館者についても、児童が全体の30%とされている利用の高い事実と併せて、今後の児童に対する図書館活動の方向を示唆している。

5 貸出し図書からみた読書傾向について

先に述べた蔵書回転率を分類(部門)別に出したのが、別表7の「分類別図書貸出状況調」である。この表でわかるとおり、利用(回転率)頻度の一番高いのが文学・小説類の3.3回であり、低いものは産業交通類の0.82回及び語学類の0.84回となっている。その他の部門では、回転率が1~1.5回にあるのは歴史・地理類(1.43回)、総記類(1.13回)、社会科学(1.02回)があり、1.5~2回までは工業・家事類(1.96回)、哲学・宗教及び芸術・スポーツ類(各々1.85回)、自然科学類(1.57回)となっている。

図書の利用頻度からみると、文学・小説をはじめとし工業・家事、芸術・スポーツの部門が多く読み、読書傾向は趣味・娯楽・実用の図書に集中しているようであるが、一方、哲学・宗教部門も高い率を示しているのが注目される。しかしながらこの蔵書回転率は、読書傾向を表わす反面、各部門の蔵書の在冊数に規定される。よき蔵書が多くなり魅力があれば利用は高まる。従って現状の多様な蔵書による単純な統計値からだけでは、部門毎の傾向の比較はつつまねにならない。いずれにしても将来の蔵書購入計画の際に考慮しなければならないデータである。即ち、図書の需要の多さに比べ利用される部門の図書が少ないために一冊の本が何回も利用されるからである。

次に一般図書の年間貸出し冊数の中で各分類ごとの図書がいかなる割合で読まれたかをみると、別表8の「階層別読書傾向調」の下段に記されたようになる。この表によると文学・小説類の60.9%を最高と
(13)

し、その他は10%以下となっており、産業・交通類の0.8%が最優となっている。即ち、5%以上の貸出し割合であるのは歴史・地理の8.2%、社会科学7.1%、芸術・スポーツ5.8%、哲学・宗教5%であり、5%以下の部門では自然科学4.7%、工業・家庭3.4%、総記3%、語学1.1%となっている。

この貸出し順位は読書回転率の一冊の本の利用頻度を示すものでなく、貸出し総冊数の中の各分類ごとの割合であるので読書傾向が一層はつきりする。この数値でみると、文学・小説類を中心とし、伝記・旅行関係を含んだ歴史・地理類と社会科学、芸術・スポーツ類となり、これらの部門で一般読書の貸出し冊数中の82%をしめている。

さらに、この読書傾向を年間貸出し冊数から階層ごとに分類別にみたのが、別表8にみられる数値である。これによると、各階層を通じ、文学・小説類が57~68%の高い割合で一番読まれている。その他の部門についてみると、その割合に多少の差があるが、歴史・地理類が共通してよく読まれ、その中でも「中学生」と「その他」の階層が目立ち、「その他」の中には受験生と老人層が多く含まれていることによるものであろう。

次に、文学・小説類を除いた各部門について、各階層別にみると以下のとおりになる。

中学生では自然科学が8.3%と読まれ、これは他の階層にみられない特徴であり、芸術・スポーツも歴史・地理類の10%について9.5%と高い。学生では、社会科学3.9%、歴史地理8.5%について哲学・宗教が7.5%と高いのは当初から予想された結果のとおりであり、学生層は教養と思索に重点を置いた、

学校生活に密着した読書をおこなっている。

次に勤人層では、社会科学8.3%、歴史・地理2.4%の他に芸術・スポーツの6%が目立っており、一言して教養、趣味、娯楽の読書の三つの要素を持った読書であることがわかる。

主婦の利用は工業・家事類が9.1%と高く、歴史・地理と総記類が5.2%と続いている。総記類が高いのはこの中に雑誌を含んでいるからであろう。即ち、主婦は婦人雑誌を含めて家事・家庭に関する図書が中心になっており、それに伝記、旅行ガイド等を含んだ歴史・地理関係のものが多く読まれている。

その他の階層には自営、受験生、無職が含まれるが、この層では歴史・地理13.6%の他に、芸術・スポーツの7.2%が多く、ついで哲学・宗教の4.6%となっており、ここでも歴史・地理が多く読まれているのが特徴となっている。

次に別表9の「分類別による階層別貸出し割合調査」により、貸出し図書各分類(部門)別ではどの階層によく借り出され読まれたかをみると、学生・勤人層が各部門を通じ平均してよく読んでおり、各分類ごとにこれをみるとおよそ次のとおりである。

総記類の利用が目立つのは、貸出し冊数の36%が学生であり、ついで勤人の36%、主婦の25%となっている。哲学・宗教では学生が63%と圧倒的に多く、次に勤人が高く19%となっている。歴史・地理類では学生44%、勤人22%が高率を示す他に中学生の16%が目立っており、社会科学においては主婦の8.8%が、学生の54%、勤人の29%について3位の利用がある。また、自然科学は中学生の

24%と多いのに特色があり、学生47%、勤人18%となっている。工業・家事部門においては、学生25%、勤人20%を大きく超えて主婦の利用が37%と高くなっている。これはこの部門の蔵書の中で工業関係よりも家事に関する図書が多く利用されているのである。その他、産業・文芸、芸術・スポーツ、諸学の各部門の貸出し割合を平均すると、学生が42%、勤人が26%、中学生の18%の順となっている。

文学・小説類では、学生40.5%、勤人25.5%、主婦13.5%、中学生13.2%、その他5.3%となっており、これは階層別による年間貸出し冊数の割合とはほぼ同様になっている。即ち、学生42.5%、勤人24.6%、主婦14%、中学生13.3%、その他5.6%であり、貸出率、貸出順位とも同じ傾向を示している。

6. 蔵書について

図書館の生命は蔵書にある。いかなる設備、人員を誇っていても図書資料がなければ図書館は一日たりとも活動はできない。

調布市立図書館は施設の關係上、閲覧業務が制約されており、かつ一般利用者のいろいろな社会生活への制約があるので、活動の主体は貸出しが中心におかれている。この場合、蔵書が多くその種類が豊富でないと、利用者にとって魅力がなくなり、図書館の価値が半減する。しかしながら図書館が市民全体の奉

仕者としてその役割を真心で果たさなければならぬのはいうまでもないが、市民のあらゆる要求を完全にかつ十分に満すには、膨大な数の図書資料を収集しなければならない。これは一市立図書館の能力を大きく超えるものでとついででき得ない。

そこで一般的に市民図書館は、高度な学術的専門的な図書を備えることを必要とはしないが、少なくとも日常の社会生活に不可欠な蔵書を持たなければならないことになる。即ち、市民の要求する図書資料の70~80%は最少限備え、応じられることが必要とされる。そして残りの学術的専門的な要求である20~30%のものについては、国会、都立、その他の専門図書館を利用することも考えなければならない。

しかし、調布市立図書館は開館以来1年10月と歴史が浅く、蔵書についてもまだ不十分な状態にあり、日常の用に供するだけの図書資料も不足がちで、市民の欲するところのものを直に応じられないのが現実であり、早急に改善していかなければならない課題である。

昭和41年6月開館当時においては、蔵書数わずかに5,623冊で発足し、年度末(昭和42年3月31日)で9,254冊となった。昭和42年度中においては、別表10の「年間蔵書増加調」にみられると通り5,606冊が増加し14,860冊となったのである。増加の内訳は、購入が4,578冊で全体の33%、次に寄贈の903冊で16%となり、その他の増加は移替等であり107冊の2%となっている。寄贈図書が増加図書の16%の多くに達しているのは、市民各位の市立図書館に対する深い理解と協力のたまものであり感謝すると共に、今後の物心両面からの一層の協力が得られるよう努めたい。

このように同館当初から比較すると、蔵書は2.64倍に増加したのであるが、他の公立図書館の状況をみると、おおよそつぎのとおりである。(18)

三多摩にある公立図書館の平均蔵書数は32,800冊、東京都全公立図書館平均では28,700冊であり、全国平均では29,100冊となっているから、調布市立図書館としても3万冊は備えたいところである。

同館当時の貧弱な蔵書からみれば、短期間に順調な増加をみたものの、なお不十分な状態におかれており、図書保証率からこの状態をみると、前年度は0.07であったが、本年度は0.11と1.6倍になった。この図書保証率とは、蔵書数を人口で除したものであるから、この数値は市民1人当りの図書の数を表わし、従って前年度は調布市民1人についてわずか0.07冊であり、本年が1.6倍になったとはいえ、市民1人が0.1冊の図書しか保有していないのが現状である。

次に蔵書構成についてであるが、全蔵書14,430冊のうち一般図書が82.6%の12,072冊、児童図書が17.4%で2,558冊である。そして入館者(利用者)のうち一般が98%、児童が32%となっており、さらに貸出冊数の割合をみると一般が53%、児童が47%となっている。

このように、入館、貸出し等その利用度がいずれも児童の方が、蔵書構成に比して高いので、児童用図書も一般のそれよりも充実しなければならない。また、一般図書のうち40%が文学・小説類であるが貸出しでは87%と高率を示しており、利用が高いので、図書購入の際に考慮しなければならない。

別表7の「分類別図書貸出状況調査」にみられるごとく、その他の部門についても蔵書構成の割合と比較

すると利用の高低があるので、部門によっては不足しているもの、利用されていないものがあり、蔵書の構成が不均衡な状態にあるようである。しかし、現在では蔵書に魅力がないから利用が少ないということが十分に考えられるので、一定水準に達するまでは各部門を適し充実させることが急務であろう。

なお、蔵書の購入計画について参考になるのは、先に述べた別表7の中の各分類別蔵書構成比、一冊当りの図書回転率及び貸出し割合である。これによると、前述したごとく、文学・小説類は部門中蔵書も多いが回転率、貸出し割合も一番高く需要が多いので、この部門をさらに充実する必要がある。次に歴史・地理、社会科学類は蔵書構成、貸出し割合が高いが、回転率が低いところから、比較的求めに応じられる蔵書を備えているといえよう。

図書分類中、哲学・宗教、芸術・スポーツ類の回転率はオヨソ位で高く、貸出しも多いが、これに比し図書が少いようである。また工業・家事部門の回転率は文学・小説の次に高いにもかかわらず、貸出冊数が少ないところから利用度の高さがうかがわれ、蔵書を豊富にすれば貸出しはさらに伸びよう。

その他、総記、産業・交通、語学類は図書も少なく、回転率、貸出し割合も低くなっているので、蔵書を豊富にすることによって、新鮮な魅力を与え利用を高めることが必要であろう。

このように今後とも図書を増やすことが急務ではあるが、ただいたづらに数を増やすのではなく、市民の要求するところをよく理解し、眠らせておく図書がないよう考慮し、役立つ図書・利用される図書を整備して生きた魅力あるものにしていきたい。(19)

7. 館外活動等について

(20)

図書館活動は図書閲覧・貸出しがその中心になるのは勿論であるが、その他に読書会、講演会、研究会、映写会等の館外活動が重要な役割を持っている。即ち、図書館が地域の文化活動の拠点であるとの見地からすれば、この館外活動は図書館にとって不可分の要素である。

前年度においては、開館初年度のため館内外の整備に追われ図書、貸出し業務についても満足し実行できなかったが、本年度ではわずかではあるが館外活動を行なった。

しかしながら、資料不足、人員不足等のためその意欲にもかかわらず十分な活動ができなかった。実施した活動については所期の目的を果たしたものと考えている。即ち、本年度は市立図書館の存在を知ってもらい、理解されることを中心にした市民利用者の懇談会と読書に関する講演会等を実施したのである。利用者の懇談会では、学校図書室（市立小学校）、館内利用者、各地域の市民等、各対象別に7回実施した。講演会では、文学と人生（作家阿部知二）、子どもと読書（児童図書研究家 代田 昇）、子ども達の求める本（慶応大学助教授 渡辺茂男）、読書とテレビ（映画監督 羽仁達）等の内容でおこない、またバスによる文学鑑賞、武蔵野文学散歩（評論家野田亨太郎）を実施した。

その他、子どもを中心とした映画会を市内2か所においておこなった。しかしこの映画会については、当市立図書館には視聴覚資料（映画、幻灯フィルム、紙芝居、レコード等）が備えていないので、市立日比谷図書館より16ミリフィルムを借り出して実施したものである。なお、その他にも、市内幼稚園等か

らの要求により、日比谷図書館の視聴覚資料の輪流をおこなった。

以上のように、視聴覚資料の不足ということが館外活動を大きくさまたげており、この資料の収集整備が当市立図書館における急務となっている。また、会議室、集会室の設備がない点もあり、本年度の活動の多くは図書館以外の設備（公民館等）を利用せざるを得なかった。

これらの資料、設備が完備されれば、今後の館外・集会活動の姿も大きく変わり、なお一層市民に親しまれる図書館になること大できよう。

以上のような分析を通して、本図書館は、91年目と比較すると驚異的な活動の伸長を示し、市民の間に着実に存在を認められ、その傾向が高まっているが、館内・館外の活動の本格的な展開はこれからであって、ようやく活動の基礎ができつつある段階といえよう。

市民図書館の課題は無限に多いが、少ない人員でより効率的な活動をすることを目標として、調布市の図書館の方向づけができてきたということができよう。

(21)

表1 図書館利用状況調

自昭和42年4月1日
至昭和43年3月31日
人口134,027(昭和42.4.1現在) (22)

年 月	年 別 月 別	貸 出 冊 数						入 館 者					図 書 貸 出 件 数							
		一 般		児 童		左 の 計		一 般	児 童	左 の 計	月 間 最 高	月 間 最 低	一 日 平 均	一 般	児 童	左 の 計	月 間 最 高	月 間 最 低	一 日 平 均	
		借 出 冊 数	返 却 冊 数	借 出 冊 数	返 却 冊 数	借 出 冊 数	返 却 冊 数													
42年	4月	23	1,514	1,514	1,248	1,248	2,762	2,762	3,579	1,734	5,313	920	40	231	1,017	738	2,355	170	60	103
	5月	24	611	2,125	548	1,796	1,159	3,921	5,947	1,955	7,902	472	193	329	1,795	1,175	2,970	160	86	124
	6月	25	323	2,448	331	2,127	654	4,575	5,865	2,731	8,536	482	223	341	2,094	1,866	3,960	209	94	159
	7月	26	384	2,832	343	2,470	727	5,302	6,700	3,379	10,079	508	257	387	2,121	2,210	4,331	264	109	67
	8月	26	346	3,178	259	2,729	665	5,907	5,744	3,358	9,102	602	272	431	2,114	2,237	4,351	307	141	111
	9月	23	331	3,509	296	3,025	627	6,534	6,599	3,307	9,906	896	293	431	2,557	2,063	4,620	401	145	201
	10月	25	290	3,799	278	3,303	568	7,102	6,884	3,183	10,067	627	176	462	2,622	2,125	4,747	279	97	196
	11月	22	236	4,035	314	3,617	550	7,652	5,567	3,217	8,784	661	234	399	2,447	2,466	4,913	307	139	223
	12月	21	141	4,176	158	3,775	299	7,951	5,436	2,409	7,845	673	174	271	2,294	1,977	4,271	361	117	199
43年	1月	21	183	4,359	160	3,935	343	8,294	5,423	2,271	7,694	610	234	366	2,001	1,793	3,794	275	103	20
	2月	23	333	4,692	241	4,176	574	8,868	7,163	2,665	9,828	602	184	428	2,589	2,293	4,882	329	75	213
	3月	19	214	4,906	211	4,387	425	7,293	5,226	2,626	7,852	552	224	413	2,256	2,254	4,510	343	117	232
合 計	278	4,966	4,966	4,387	4,387	9,293	9,293	70,073	32,835	102,908					16,967	23,397	49,704			
月平均	23	469		366		775		5,839	2,736	8,576					2,192	1,950	4,141			
一日平均		18		16		33		252	118	270					75	84	139			

備考 座席回転率 学生一般 252/120 = 210% 児童 118/24 = 492% 計 379/41 = 257%
 登録率 (登録人口) 9,293/134,027(常住人口) = 6.9%
 貸出率 (年別貸出冊数) 49,704/134,027(常住人口) = 0.37冊
 図書回転率 (年別貸出冊数) 49,704/14,866(年別入館者数) = 3.34冊 児童 26,307/2,272 = 2.14回 23,397/2,588 = 9.04回

表2 図書館利用状況前年度との比較調

(表中 前年対比は前年を100とした場合の数値)

区 分	41年度	42年度	増 減	前年対比	区 分	41年度	42年度	増 減	前年対比	
										貸出利用率(登録者1人当り)
入 館 者	一般	42,977	70,073	27,096	163	一般	5,09	5,35	0.26	105
	児童	12,726	32,835	20,109	258	児童	1.46	2.10		144
	計	55,703	102,908	47,205	185	計	2.54	4.92		194
登 録 者	一般	2,161	4,906	2,745	227	(平均)	1.62	2.57		159
	児童	921	4,387	3,466	476	一般	7.946	12.272	4.326	154
	計	3,082	9,293	6,211	302	児童	1,308	2,588	1,280	198
登 録 率	2.4%	6.9%		288	計	9,234	14,860	5,606	61	
貸 出 冊 数	一般	10,115	26,307	16,192	260	一般	1.29	2.14	0.85	66
	児童	5,587	23,397	17,810	419	児童	4.52	9.04	4.52	200
	計	15,702	49,704	34,002	317	(平均)	1.73	3.34	1.61	93
貸 出 率	0.12	0.37	0.25	308	図書保証率	0.07	0.11	0.04	157	

表3 階層別入館者数調

階層別	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計	階層別 入館割合
中学生	216	953	825	1,342	1,403	1,044	973	922	754	766	816	582	10,976	10.7%
高校生	1,714	2,997	2,824	2,957	2,380	3,223	3,087	2,378	2,396	2,470	3,290	2,326	32,147	31.2
勤人	470	599	664	772	605	705	758	716	524	584	701	657	7,765	7.5
主婦	175	295	332	345	276	306	438	435	358	366	446	495	4,337	4.2
その他	519	1,103	1,180	1,284	1,080	1,281	1,628	1,116	1,414	1,217	1,860	1,166	14,848	14.4
一般計	3,579	5,947	5,805	6,700	5,744	6,399	6,884	5,507	5,436	5,423	7,163	5,226	70,073	68.1
児童	1,734	1,955	2,731	3,379	3,358	3,307	3,183	3,217	2,407	2,271	2,665	2,626	32,835	31.9
合計	5,313	7,902	8,536	10,079	9,102	9,906	10,067	8,784	7,845	7,694	9,828	7,852	102,908	100.0

表4 地域別入館者調

地域名	地域人口 (昭和43年1月1日現在)	入館者数			入館者割合 (階層別入館者数 / 入館者総数)			地域別平均 (階層別入館者数 / 地域人口)
		一般	児童	計	一般	児童	合計	
蒲田給	3,726	1,660	716	2,376	2.4%	2.2%	2.3%	4.5%
上石原	7,439	2,934	2,179	5,113	4.2%	6.6%	5.0%	1.9%
下石原	11,613	5,604	4,395	9,999	8.0%	13.4%	9.7%	3.6%
富士見町	8,238	4,401	1,644	6,045	6.3%	5.0%	5.0%	2.5%
小泉町	7,805	6,507	4,723	11,230	9.3%	14.4%	10.1%	3.1%
上布田町	5,613	4,386	4,192	8,578	6.3%	12.7%	8.2%	1.7%
下布田町(上給)	7,087	4,626	3,605	8,231	6.7%	11.0%	8.0%	1.6%
安地	6,497	3,014	2,196	5,210	4.3%	6.7%	5.1%	40.2%
西領町	16,641	7,008	2,019	9,027	10.6%	6.2%	8.8%	2.6%
深大寺町	15,807	2,894	1,178	4,072	4.1%	3.5%	4.0%	25.8%
佐須町	3,879	963	366	1,329	1.4%	1.1%	1.3%	34.3%
栄崎町	5,663	1,038	96	1,134	1.5%	0.3%	1.1%	31.0%
西ついで(給)	14,243	1,354	990	2,344	1.9%	3.0%	2.3%	16.8%
東ついで(給)	9,517	1,087	176	1,263	1.6%	0.5%	1.2%	13.2%
荏葉町	4,109	727	75	802	1.0%	0.2%	0.8%	19.5%
大町	2,796	698	323	1,023	1.0%	1.0%	1.0%	26.9%
仙川町(給)	4,097	678	28	706	1.0%	0.1%	0.7%	17.2%
緑ヶ丘	6,643	456	19	475	0.7%	0.1%	0.5%	7.2%
市内計	139,275	50,035	28,922	78,957	7.1%	88.1%	76.7%	56.7%
市外計		7,137	879	8,016	10.2%	2.7%	7.8%	
不明		12,901	3,024	15,935	18.4%	9.2%	15.9%	
合計		70,073	32,835	102,908				

表5 図書館を中心とした距離別入館者調

距離区分	人口	入館者数	利用率	談話地域	距離別入館者割合
(A) 1km以内	51,518 ^人	38,038 ^人	73.7%	下石原, 小高, 上布田, 下布田	26.1%
(B) 1km以上 1.5km以内	24,339	15,072	61.9%	富士見, 国領	14.9%
(C) 1.5km以上 2km以内	17,815	11,652	65.4%	上石原, 佐須, 菜地	11.4%
(D) 2km以上	65,603	14,195	21.6%	飛田給, 深大寺, 紫崎, 西田, 上野, 若菜, 大野, 仙川, 緑ヶ丘	13.7%
(E) 2km以上 5km以内	35,857	53,110	148.1%	(A)+(B)の地域	51.1%
(F) 2km以上 5km以内	73,672	64,762	87.9%	(A)+(B)+(C)の地域	62.6%

[備考] 入館者から市内77%, 市外8%, 不明15%となっている。市外は特に市外中野三橋市が多い。

表6 館内閲覧者調(推定)

階層別	(A) 入館者数	(B) 貸出冊数	(C) 閲覧者数	(D) 階層内閲覧者比 (C/A)	(E) 階層別閲覧者割合 (C/閲覧者合計)	総入館者に対する 閲覧者割合 (C/入館者総数)
中学生	10,976 ^人	3,500 ^冊	7,470 ^人	68%	14.0%	7.3%
学生	32,147	11,183	20,964	65	39.4	20.4
勤人	7,765	6,472	1,293	17	2.4	1.0
主婦	4,337	3,674	663	15	1.3	3.6
その他	14,848	1,472	13,376	90	25.1	13.0
小計	70,073	26,307	43,766	62	82.3	42.5
児童	32,835	23,397	7,438	29	17.7	9.0
合計	102,908	49,704	53,204	53		

表7 分類(部門)別図書貸出状況調

(28)

区分 分類(部門)		年間貸出冊数	月平均 貸出冊数	1日平均 貸出冊数	一般図書 貸出割合	読書回数	一般図書 読書構成比
2部門	総記	775冊	65冊	2.8冊	3.0%	1.14冊	5.6%
1	哲学・宗教	1324	110	4.8	6.0	1.85	3.8
2	歴史・地理	2165	180	7.8	8.2	1.43	12.3
3	社会科学	1855	155	6.7	7.1	1.02	14.9
4	自然科学	1233	103	4.4	4.7	1.59	6.3
5	工業・家庭	904	75	3.3	3.4	1.76	3.8
6	産業・交通	220	18	0.8	0.8	0.82	2.2
7	芸術・スポーツ	1515	126	5.4	5.8	1.85	6.7
8	語学	292	24	1.1	1.1	0.84	2.8
9	文学・小説	16024	1335	57.6	60.9	3.30	46.6
一般図書計		26307	2192	94.6	一般と児童 との割合	2.14	一般と児童 との構成比
児童図書計		23397	1950	84.2	一般 52.9	9.04	一般 82.6
合計		49704	4142	178.8	児童 47.1	3.34	児童 17.4

表8 階層別読書傾向(貸出状況)調 (但し児童を除く)

分類(部門)別		0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	貸出冊数 計
階層別	総記	哲学宗教	歴史地理	社会科学	自然科学	工業家庭	産業交通	芸術スポーツ	語学	文学小説		
中学生	貸出冊数(冊)	55	69	349	97	272	120	43	332	20	2109	3506
	分類別貸出割合(%)	1.6	2.0	10.0	2.8	8.3	3.4	1.2	9.5	1.1	60.1	
学生 (専攻大学生)	貸出冊数(冊)	277	835	948	1002	582	229	78	593	147	6494	11183
	分類別貸出割合(%)	2.5	7.5	8.5	8.9	5.2	2.0	0.7	5.3	1.3	58.1	
勤人	貸出冊数(冊)	187	255	478	537	227	179	64	386	72	4087	6472
	分類別貸出割合(%)	2.9	3.9	7.4	8.3	3.5	2.8	1.0	6.0	1.1	63.1	
主婦	貸出冊数(冊)	170	97	192	164	67	335	18	98	20	2491	3674
	分類別貸出割合(%)	5.2	2.6	5.2	4.5	1.9	9.1	0.5	2.7	0.5	67.8	
その他 (専攻大学生 を除くその他)	貸出冊数(冊)	66	68	200	55	63	41	17	106	13	843	1472
	分類別貸出割合(%)	4.5	4.6	13.6	3.7	4.3	2.8	1.1	7.2	0.9	57.3	
貸出冊数合計(冊)		775	1324	2165	1855	1233	904	220	1515	292	16024	26307
分類別貸出割合(%)		3.0	5.0	8.2	7.1	4.7	3.4	0.8	5.8	1.1	60.9	

(29)

表9 分類(部門)別による階層別貸出割合

階層	分類(部門)	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	階層別 貸出割合
		総記	哲学宗教	歴史地理	社会科学	自然科学	工業家庭	産業交通	芸術スポーツ	語学	文学小説	
中学生		7.3%	5.2%	16.1%	5.2%	23.7%	13.3%	19.5%	21.8%	13.7%	13.2%	10.3%
学生(高校大学)		35.7	63.1	43.7	54.0	47.2	25.3	35.5	39.1	50.3	46.5	42.5
勤人		24.1	19.8	22.1	29.0	18.4	19.8	29.1	25.5	24.7	23.5	22.6
主婦		24.5	7.3	8.9	8.8	5.6	37.1	8.2	6.6	6.9	13.3	4.0
その他		8.5	5.1	9.2	3.0	5.1	4.5	7.7	7.6	4.4	3.3	3.6
分類別 蔵書回転率		1.13	1.85	1.43	1.02	1.59	1.46	0.82	1.85	0.85	3.30	2.14
分類別 貸出冊数		773	1,324	2,165	1,855	1,233	904	220	1,515	292	16,024	26,307
分類別 蔵書数		691	715	1,510	1,826	776	461	270	819	346	4,858	12,272

表10 年間蔵書増加額

分類(部門)	増減率の区分	前年度末 蔵書数	増				減	純増	昭和43年度末 蔵書数	一般図書 蔵書構成比	蔵書増加率
			購入	寄贈	その他	計					
0部門	総記	442	171	29	1	201	2	199	691	3.6%	40.4%
1	哲学・宗教	435	188	62	19	269	9	260	715	5.8	57.1
2	歴史・地理	828	318	85	20	623	11	612	1,510	12.3	68.2
3	社会科学	1,069	635	129	14	778	21	757	1,826	14.9	70.8
4	自然科学	442	274	64	3	341	7	334	776	6.3	73.6
5	工業・家庭	321	127	5	10	142	2	140	461	3.8	43.3
6	産業・交通	213	55	7	1	63	6	57	270	2.2	26.8
7	芸術・スポーツ	467	317	33	4	354	2	352	819	6.7	75.4
8	語学	195	121	29	2	152	1	151	346	2.8	77.4
9	文学・小説	3,394	1,113	361	9	1,483	19	1,464	4,858	40.0	43.1
小計		7,946	3,519	804	83	4,406	80	4,326	12,272		54.4
図書図書		1,308	1,159	49	24	1,282	2	1,280	2,588		97.9
合計		9,254	4,678	903	107	5,688	82	5,606	14,860		60.6

(備考) 1 増加内訳 購入82.2% 寄贈10.9% その他1.9%
 2 年度末蔵書内訳 一般図書82.6% 児童図書17.4%

1881

